日本古典文学全集

義経記

校注・訳　梶原正昭

小学館・刊

義経記　　日本古典文学全集 31

昭和46年10月10日　初　版発行
昭和53年11月20日　第四版発行

校注・訳者　梶原正昭（かじはら まさあき）

発行者　相賀徹夫
東京都千代田区一ツ橋2-3-1

印刷所　図書印刷株式会社
東京都港区芝三田5-7-3

発行所　株式会社　小学館
東京都千代田区一ツ橋 2-3-1
〔郵便番号〕101〔振替〕東京 8-200
〔電話番号〕編集 東京 03-230-5662
製作 東京 03-230-5333
販売 東京 03-230-5739

© M. Kazihara　1971
Printed in Japan
（著者検印は省略いたしました）

造本には十分注意しておりますが，万一落丁，乱丁などの不良品の場合は，おとりかえいたします。

本書の一部あるいは全部を無断で複写複製（コピー）することは，法律で認められた場合を除き，著作者および出版社の権利の侵害となります。あらかじめ小社あて許諾を求めて下さい。

目次

解説……五
凡例……四〇
巻第一……四五
義朝都落の事……四七
常盤都落の事……四八
牛若鞍馬入の事……五三
少進坊の事……五四
牛若貴船詣の事……五八
吉次が奥州物語の事……六三
遮那王殿鞍馬出の事……六八
巻第二……七五
鏡の宿吉次が宿に強盗の入る事……七七
遮那王殿元服の事……八五
阿濃禅師に御対面の事……八八
義経陵が館焼き給ふ事……九〇
伊勢三郎義経の臣下に
はじめて成る事……九四
義経秀衡にはじめて対面の事……一〇六
義経鬼一法眼が所へ御出での事……一〇九

巻第三……一三三
熊野の別当乱行の事……一三五
弁慶生まるる事……一四〇
弁慶山門を出る事……一四五
書写山炎上の事……一四七
弁慶洛中にて人の太刀を奪ひ取る事……一六一
弁慶義経に君臣の契約申す事……一六六
頼朝謀反の事……一七四
頼朝謀反により義経奥州より出で給ふ事……一八〇
巻第四……一八五
頼朝義経対面の事……一八七
義経平家の討手に上り給ふ事……一九三
腰越の申状の事……一九八
土佐坊義経の討手に上る事……二〇三
義経都落の事……二三一
住吉大物二か所合戦の事……二四五
巻第五……二五五
判官吉野山に入り給ふ事……二五七
静吉野山に捨てらるる事……二六三
義経吉野山を落ち給ふ事……二七一
忠信吉野に止まる事……二七六
忠信吉野山の合戦の事……二八六
吉野法師判官を追ひかけ奉る事……三〇五
巻第六……三一三

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

忠信都へ忍び上る事……三三五
忠信最期の事……三三〇
忠信が首鎌倉へ下る事……三三九
判官南都へ忍び御出である事……三四二
関東より勧修坊を召さるる事……三五〇
静鎌倉へ下る事……三六八
静若宮八幡宮へ参詣の事……三七八

巻第七……四〇三

判官北国落の事……四〇五
大津次郎の事……四一九
愛発山の事……四二六
三の口の関通り給ふ事……四二八
平泉寺御見物の事……四四〇
如意の渡にて義経を弁慶打ち奉る事……四五一
直江の津にて笈探されし事……四五四
亀割山にて御産の事……四六一
判官平泉へ御着の事……四六四

巻第八……四六七

秀衡死去の事……四六九
秀衡が子供判官殿に謀反の事……四七三
鈴木三郎重家高館へ参る事……四七九
衣川合戦の事……四八一
判官御自害の事……四八九
兼房が最期の事……四九六
秀衡が子供御追討の事……四九七

補遺……五〇一

校訂付記……五〇九

付　録

系　図……五一四
地　図……五一八
『義経記』関係年表……五二〇
『義経記』影響一覧……五二八
登場人物略伝……五三四
地名索引……五六〇

口絵目次

源平合戦図屏風……1
源義経公木像……5
伝義経奉納鎧・義経籠手……6
義経自筆書状……7
源義経東下り絵巻……8
義経記（田中本）……10
よしつね物語（赤木文庫本）・義経記（丹緑絵入本）……11
平泉全盛古図……12

解説

一　はじめに

判官びいき

昔から東北地方では、地芝居の中に、判官義経が登場しないとおさまらないという風習があった。たとえば、『忠臣蔵』や『菅原伝授手習鑑』のような、義経とはまったく無関係な狂言の最中でも、一時芝居の進行を止めて、御大将の装束を美々しく着飾った判官が花道から舞台に登場し、客席に向かって大見得を切り、

「かかるところへ義経公、ひと間のうちより出で給ひ、さしたる用事もあらざれば、ふたたび奥へと入り給ふ」

という床の義太夫で退場するというようなことが、比較的最近まで実際におこなわれていたといわれる。（戸板康二「役者の田舎わたらい」――『日本人物語』第三巻「漂泊の人生」所収）

東北地方は義経とはことに縁の深いところで、古くから判官義経という人物に対する特別な感情があり、こうした慣例がつくり出されて来たものであろうが、この時期には江戸や上方などの中央の舞台でも、「判官もの」と呼ばれる狂言が大きな人気を得ており、「判官びいき」の風潮はほとんど全国的なものであったといってよい。

日本歴史の中に登場する多くの英雄や武将の中で、九郎判官源義経の名ほど、人々の間で親しまれ、また敬愛されてきたものは、

おそらくないだろう。

後年、有名な「腰越状」の中でみずから、

義経身体髪膚を父母に受けて、幾の時節を経ず、故頭殿の御他界の間、孤子となりて、母の懐中に抱かれ、大和の国宇陀の郡、龍門の牧に赴きしより以来、一日片時も安堵の思ひに住せず、甲斐なき命ばかりは存すと雖も、京都の経廻難儀の間、諸国に遊行せしめ、身を在々所々に隠し、辺土遠国を栖とし、土民百姓に服仕せらる。

と述懐しているように、源氏の没落の悲運のまっただ中に生を受け、苦難の中に生い立った義経は、兄頼朝の挙兵とともにその旗の下に馳せ参じ、鎌倉殿の代官として源平合戦の晴れ舞台に登場し、めざましい活躍を見せるが、平家打倒の宿願を果たしたよろこびも束の間で、やがて兄頼朝との不和から京都を没落、みじめな潜伏と放浪の生活を重ねた末、ひそかに身を寄せた奥羽の地で、頼りにしていた藤原氏一族に攻められ、三十一歳の若さであえない最期をとげる。――その生涯は、いかにも乱世に生きた風雲児らしく波瀾にみちており、人々の夢をかき立てるに十分なものがあったし、功多くして報いられることのなかった悲劇的な運命に対する同情が、いわゆる「判官びいき」の感情となって、義経に対する不思議な人気をつくり上げることになったものと思われる。

「判官びいき」というのは、すばらしい英雄に対するあこがれと尊敬に、すぐれているにもかかわらずその英雄が不幸であることに寄せる同情の念とが合わさったものであるといわれるが、島津久基氏の『義経伝説と文学』によると、「判官びいき」という言葉が使われたもっとも古い例は、貞門の俳人松江重頼が寛永十五（一六三八）年に編纂した『毛吹草』という書の巻五〝春の部〟にある、「世や花に判官びいき春の風」という作者不詳の句あたりからであろうとされる。この書は俳諧の式目や作法を説いた手引書で、作句の参考になる事項がいろいろとあげられているが、巻二の〝世話（俚諺）と古語〟の項目の中にも、「はうぐはんひいき」という句が、「朱にまじはればあかくなる」や「いわしのかしらもしんじんから」などの俚諺と並べて書き記されており、この頃すでに慣用句化されていたものらしいことが知られる。言葉そのものの成立は、したがってこれよりもさらに古く、島津氏も推測されているように、お

そらく室町時代の末頃までさかのぼることができよう。義経についてのひいきの感情が世間にひろがるようになったのも、やはりほぼその頃のことと見てよい。

判官ものと『義経記』

判官義経の武将としての資質に対する畏敬の念は、しかしその在世の当時からすでにあった。たとえば寿永三(一一八四)年の二月、一の谷の合戦で平家を撃ち破って都に凱旋したのち、義経は仁和寺の御室守覚法親王に召されて戦いの次第を語ったといわれるが、その時の彼の印象を、法親王はその手記『左記』の中に、

彼ノ源廷尉(義経)ハ直ナル勇士ニアラザルナリ。張良ノ三略、陳平ノ六奇、其ノ芸ヲ携エ、其ノ道ヲ得タル者カ。

と書き留め、激賞している。

また、これから一年後の文治元(一一八五)年の十一月、義経が兄頼朝と対立しながら、都を戦火にさらすことを避けて自発的に西国に落ちた時にも、当時の政府の高官であった九条兼実は、その一行が摂津の大物浦で遭難したという噂を聞いて、その日記の中に、

義経大功ヲ成シ、其ノ詮ナシト雖モ、武勇ト仁義ニ於テハ、後代ノ佳名ヲ貽スモノカ。歎美スベシ。歎美スベシ。

と書き、その武勇と人柄とを褒めたたえている。

こうした風潮は当然文芸作品の上にも反映し、『平家物語』や『源平盛衰記』などの軍記文学での、義経の英雄化というかたちであらわれている。ことに『平家物語』の作者は、「九郎判官の事はくはしく知りて書きのせたり」と、兼好法師が『徒然草』に書いているように、判官義経の事跡にはよく通じていたらしく、多くのスペースを割いてその武将としての活躍ぶりをクローズアップし、輝かしい合戦絵巻をくりひろげて見せてくれる。

しかし『平家』や『盛衰記』が主題として追求しようとしているのは、平家の興亡をめぐる動乱の歴史であって、一武人の武功譚

ではなく、そこに描き出されている義経の活躍も、その全生涯から見ればほんの一時期のものにすぎない。『平家物語』が、入道相国清盛・旭将軍義仲・九郎判官義経の三人を中心とする三部に分けられることは、すでに早く山田孝雄氏によって指摘されたところだが、この三人のうち、清盛・義仲がともに〝盛者必衰の理〟の体現者として、その栄華と没落を強く印象づけているのに反し、ひとり義経のみは、いかなるわけかその生い立ちと末路とを明らかにしていない。宇治川の合戦にはじまり、一の谷・屋島を経て壇の浦の決戦にいたるその合戦記でのクローズアップのはなやかさの割には、義経には知られざる謎の部分があまりにも多いといわねばならない。

その理由はいろいろに考えられるが、ひとつには、頼朝治下の鎌倉幕府とそれを引き継いだ北条政権のもとで、義経の悲運を語ることが、頼朝への非難・幕府への批判につながるものとしてタブー化され、表沙汰にすることがはばかられたという事情もあったのであろう。

しかしこうした制約が加えられれば加えられるほど、逆に「判官びいき」の庶民感情が昂まってゆくのも自然で、義経に関する未知の部分を明らかにしたいとの願いも強く、そうした英雄に対する大衆の感動と願望が、やがてさまざまな義経伝説を産み出させてゆくことになる。

高橋富雄氏は、『義経記』という作品の成り立ちについて、「歴史の重みから伝記を物語るのでなしに、歴史への願いからその伝記を物語ろうとする」もの、と規定されているが（『義経伝説』）、鎌倉幕府をはばかりながら民間に語りひろめられたさまざまな義経物語は、しだいに国民文学としての結晶を見せるようになる。そして室町時代に入るとともに、これまでの制約を解かれ、はなやかな開花期を迎えることになったものらしい。

『義経記』の成立は、以上のように、「判官びいき」の庶民感情を背景に、多くの義経伝説に作品としてのまとまりを与えたものといえるが、この書の出現はまた、人々の間の判官義経への関心をいっそう刺激し、空前ともいえる判官ブームを呼び起こして、その

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

結果、御伽草子・謡曲・幸若・浄瑠璃・歌舞伎と、室町時代の末から江戸時代にかけて、判官義経を主人公とする「判官もの」文芸のすばらしい展開をつくり出すことにもなったのである。

二　組織と内容

変則的な一代記

『義経記』が、『平家物語』の義経に関する叙述を受け、その描き足りなかった部分をあたかも補足するようなかたちで成立してきたことは、すでに述べたとおりだが、このことは、世盛りのもっともはなやかな武将としての活躍期を『平家』にゆだね、その前後の不遇な生い立ちと悲劇的な末路に、もっぱら筆を費やさせることになった。

『義経記』八巻を、その内容の上から大きく分けると、巻四の第一章の「頼朝義経対面の事」あたりを境に、これを前・後二つの部分に区切ってみることができる。つまり、牛若と呼ばれた幼児期から、遮那王の名で鞍馬山にあずけられた少年期を経て、金売吉次に伴われて奥州に下り、源氏の蹶起を待つまでの約二十年間におよぶ前半生を描いた前段と、平家を討ち滅ぼしたのち、頼朝と対立し、西国へ落ちて再起をはかろうとして果たさず、吉野・奈良と苦しい逃避行を続けたあげく、ふたたび古巣の奥州に立ち戻り、庇護者秀衡の死により、平泉の宿館で窮死するまでの三年余の後半生を描いた後段で、その間約五年におよぶ源平合戦での活躍は、

かくて御曹司戦の手合せに海道の戦に討ち勝つて、同じく寿永三年に上洛して、平家を追ひ落とし、一の谷、八島、壇の浦、所々の忠を致し、先を駆け身を砕き、終に平家を攻め亡ぼして、大将軍前内大臣宗盛父子生捕り、卅人具足して上洛し、院内の見参に入りて、去ぬる元暦元年に検非違使五位尉になり給ふ。

という、わずか数行の簡単な叙述でかたづけられているにすぎない。

その点では、一代記としてもまったく変則的なものといわねばならないが、『平家』が公人としての義経の活躍にスポットを当てているのに対し、これはいってみればその私人としての側面をクローズアップしているわけで、そこに歴史を踏まえながら必ずしもそれに制約されない、歴史的実在性を踏み越えて自由に虚構的世界をくりひろげてみせる、この作品の独自性を見てとることができる。

文学史の上では、『義経記』は「軍記もの」と呼ぶジャンルに含まれているが、『将門記』『陸奥話記』にはじまり、『保元物語』『平治物語』『平家物語』『太平記』と展開する、本格的な軍記作品とくらべると、その性格がやや違いむしろ異色といってよい。すなわち、現実の歴史に取材しこれを脚色したものという点で、本書は多くの軍記と共通するところがある半面、戦いそのものより、一個の英雄的人物の伝記をその主眼としているところに、異質なものを感じさせる。かたちの上では、したがって曾我兄弟の仇討ちを描いた『曾我物語』などに近く、この二作品は、軍記に準ずるものとして〝準軍記〟と呼ぶのがもっともふさわしいが、本書は『曾我』とくらべると伝奇性が強く、はるかに浪漫的でもあり、傍系的な説話の挿入もほとんど見られず、伝記体の歴史小説としてのまとまりを示しており、その点、中世末期の御伽草子などの文学世界につながる側面をも見せているともいえる。

義経像の美化

ところで、『義経記』が『平家物語』の影響下につくられたらしいことは、たとえば、堀川夜討における江田源三の死（巻四）と「嗣信最期」、勧修坊の鎌倉召喚（巻六）と「戒文」「海道下」、若宮八幡での静の舞の場面（巻六）と「祇王」、北国落ちに描かれた井上左衛門の温情（巻七）と「維盛入水」の一節、などの類似からも推測されるが、

本朝のむかしをたづぬるに、田村、利仁、将門、純友、保昌、頼光、漢の樊噲、陳平、張良は、武勇といへども、名をのみ聞きて目には見ず。目のあたりに芸を世にほどこし、万人の目をおどろかし給ひしは、下野の左馬頭義朝の末の子、源九郎義経とて、わが朝にならびなき名将軍にてぞおはしける。

という本書の書出しの一文なども、「祇園精舎」の冒頭句とよく似ており、これを模倣したものと見ることができる。

ただ、ここにあげられている「田村、利仁、将門、純友、保昌、頼光」といった武人たちは、『平家物語』の「承平の将門、天慶の純友、康和の義親、平治の信頼」のような逆賊としての意識ではなく、単に武勇にすぐれた勇士の代表として選ばれているだけで、それによって〝盛者必衰の理〟を示すというより、義経その人の超人性をきわ立たせるひとつの例証とされているにすぎない。岡見正雄氏は、文中の「目のあたりに芸を世にほどこし」とある、「芸を施す」という言葉が、当時猿楽・田楽・舞曲などの芸能に用いられるものであることを指摘し、「兵法に達し人を驚かすような芸当をやってのける御曹司の物語」というのが、本書の性格であることを示唆されているが、さらに「田村・利仁が鬼神を攻め、頼光・保昌が魔軍を破せしも、或は勅命をかた取り、或は神力を先として武威のほまれを残せり」(陽明文庫『保元物語』)という一節を引いて、これらの人々のイメージが御伽草子的な世界につながるものであり、それをうけ本書の義経像も、説話的ではなはだロマンチックなものになっていることを強調されている。

『義経記』と『平家物語』とを読みくらべた時、たしかにもっとも印象にのこるのは、判官義経その人の描きかたで、その相貌は同一人物でありながら、まるで別人であるかのように違ったものとなっている。「九郎は背の小さき男の、色の白かんなるが向歯の少し差出て、殊に著かんなるぞ」という『平家』の義経像は、敵方の侍越中次郎兵衛盛嗣の口を通して語られた言葉である点、多少の割引が必要であるとしても、『義経記』ではこれが「南都・山門までも聞こえたる稚児の、一昨日鞍馬を出でたることなれば、きはめて色白く鉄漿黒に、薄化粧して眉細くつくりて、衣ひきかづき給ひたりければ、姿松浦佐用姫が領巾振る山に年を経て、寝乱れ髪の隙より、乱れて見ゆる黛、鶯の羽風にも乱れぬべくも見え給ふ。玄宗皇帝の時ならば、楊貴妃とも謂ひつべし。漢の武帝の世なりせば、李夫人かとも疑はる」という、たぐいまれな美貌の持主として形象されており、その対照はいかにもはなはだしい。いささか大仰で、また類型的な形容だが、こうした美化は巻が進むにつれていよいよいちじるしく、物語の後半では、義経はさながら貴公子のような存在になり変わってしまっている。

『平家物語』から『義経記』へかけての、以上のような義経像の変貌をいったい如何に理解したらよいか。高橋富雄氏は、これを「義経において理想的な英雄を見ようとする物語精神が、武将物語だけでは満足できず、ちょうど郎等たちに武将の役目を譲って非役になった義経に、もう一つの英雄類型たる王朝貴公子の役を割りあて、そのさいなまれる流離の物語として、悲劇をさらに深めようとする構成に変ってきた」結果としてとらえられているが（前掲書）、『平家物語』を通じて一般化している義経像とは違った側面を、この物語の中に求めようとするそうした民衆感情こそ、『義経記』という作品を産み出す原動力であったともいえよう。

『義経記』の構成

ここで、『義経記』の構成について簡単に展望しておくと、前述したように巻四で前・後の二段に分けられるほか、内容的に見て、その物語的な展望の跡はつぎのように整理することができる。これは島津久基氏が作成された『義経記』関係の史料と文献の対照表を、とくに構成の面に焦点を絞ってまとめ直したものであるが、これを見ていただくと、だいたい事件中心に、それもほぼ巻ごとのまとまりをもって物語が展開せしめられていることがわかるだろう。

巻一
- ①義朝都落の事
- ②常盤都落の事
- ③牛若鞍馬入の事（鞍馬入り）
- ④少進坊の事
- ⑤牛若貴船詣の事（貴種への目ざめ）
- ⑥吉次が奥州物語の事（奥州物語）
- ⑦遮那王殿鞍馬出の事（鞍馬脱出）
- ⑧鏡の宿吉次が宿に強盗の入る事（強盗退治）
- ⑨遮那王殿元服の事（元　服）

発端

鞍馬修行

巻二
- ⑩阿濃禅師に御対面の事（阿濃禅師との対面）
- ⑪義経陵が館焼き給ふ事
- ⑫伊勢三郎義経の臣下にはじめて成る事
- ⑬義経秀衡にはじめて対面の事（秀衡との対面）
- ⑭義経鬼一法眼が所へ御出での事（六韜兵法の習得）

奥州下向（家来の獲得）

鬼一法眼物語

巻三
- ⑮熊野の別当乱行の事
- ⑯弁慶生まるる事（生い立ち）
- ⑰弁慶山門を出る事
- ⑱書写山炎上の事（書写山騒動）
- ⑲弁慶洛中にて人の太刀を奪ひ取る事
- ⑳弁慶義経に君臣の契約申す事（君臣契約）
- ㉑頼朝謀反の事
- ㉒頼朝謀反により義経奥州より出で給ふ事（頼朝挙兵）

弁慶物語

義経参陣

生い立ち（前段）

巻四
- ㉓頼朝義経対面の事（黄瀬川対面）
- ㉔義経平家の討手に上り給ふ事（源平合戦）
- ㉕腰越の申状の事（腰越状）
- ㉖土佐坊義経の討手に上る事（堀川夜討）
- ㉗義経都落の事（西国落ち）
- ㉘住吉大物二か所合戦の事

義経没落

頼朝との対立

巻五
- ㉙判官吉野山に入り給ふ事
- ㉚静吉野山に捨てらるる事（静の別離）
- ㉛義経吉野山を落ち給ふ事
- ㉜忠信吉野に止まる事（忠信身代り）

吉野山潜行

巻六

- ㉝忠信吉野山の合戦の事
- ㉞吉野法師判官を追ひかけ奉る事
- ㉟忠信都へ忍び上る事
- ㊱忠信最期の事（忠信の忠死）
- ㊲忠信が首鎌倉へ下る事
- ㊳判官南都へ忍び御出である事
- ㊴関東より勧修坊を召さるる事（勧修坊の受難）
- ㊵静鎌倉へ下る事
- ㊶静若宮八幡宮へ参詣の事（静の受難）
- ㊷判官北国落の事（京都脱出）

義経探索

巻七

- ㊸大津次郎の事
- ㊹愛発山の事
- ㊺三の口の関通り給ふ事
- ㊻平泉寺御見物の事
- ㊼如意の渡にて義経を弁慶打ち奉る事（難関突破）
- ㊽直江の津にて笈探されし事
- ㊾亀割山にて御産の事（北の方の出産）
- ㊿判官平泉へ御着の事（平泉到着）

奥州落ち

巻八

- 51(継信兄弟御弔の事)
- 52秀衡死去の事（秀衡の死）
- 53秀衡が子供判官殿に謀反の事
- 54鈴木三郎重家高館へ参る事
- 55衣川合戦の事

義経の滅亡

失意時代（後段）

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com